

《論 文》

ライフセーバー養成現場でのコミュニケーション に関する意識について

立川 和美, 稲垣 裕美, 小粥 智浩, 小峯 力

The Lifesaver's Communication on a Training

Kazumi TACHIKAWA, Yumi INAGAKI, Tomohiro OGAI, Tsutomu KOMINE

キーワード：ライフセーバー, コミュニケーション, ライフセービング

Keywords: Life Lifesavers, Communication, Lifesaving

1. はじめに

ライフセーバーは、海浜での活動に向けて日々トレーニングを積んでおり、海に関する知識や救命方法、パトロールの方法などの専門的な技術を保持している^(注1)。オーストラリアやアメリカなどでは、すでに地方公務員としてライフガードの職業が認められていることから、日本でも今後、一つのキャリアとして成立する可能性が高いと考えてよいだろう。こうした流れに伴い、ライフセーバーを養成する教育現場においては、教育の方法論の充実は不可避の問題である。そのため、ライフセービング活動におけるコミュニケーションや言語活動の問題については、今後、体系的な整理が必要だと考えられる。そこで、本稿においては、こうした課題解決に資するため、現在、ライフセーバー養成の現場にある学生たちのコミュニケーション

意識について調査を行い、その実態を分析したい。

この調査に先立ち、本稿に関連する先行研究領域について簡単に触れておく。ライフセービングのコミュニケーションに特化した先行研究は、管見では見られないが、「緊急時」や「危機時」におけるコミュニケーション、医療や介護などにおけるコミュニケーションに関する研究はいくつか見られ、これらはライフセービングにおけるコミュニケーション研究にも応用性が高いものと考えられる。

まず、危機時・緊急時におけるコミュニケーションについては、2011年の東日本大震災以降活発に行われているが、専ら「危機管理」あるいは「災害時」を対象としたものが中心となっている。ただ、被災者が冷静さや客観性、正常な判断能力を失った状態にある場合に、自分自身の立場を理解したり、現状の問題解決につな

がるための行動を行ったりするための方策を考えるという側面では、レスキュー時のライフセーバーのコミュニケーションともつながるものと言える。

斎藤（2009）は、地震や災害時における被災者の精神的コントロールという側面から、カウンセラーやセラピストのコミュニケーションストラテジーについて論じているが、「相手の心情を解せず、不用意に投げかけられた心ない言葉は、心ない仕打ちということになりかねない。たとえクライアントとのラポールが十分確立していて、何でも話せるほどに相互の信頼関係が深まっていたとしても、慎重に言葉を選ぶという原則はあくまでも崩せない」とし、クライアントに対する誠実な言葉かけの重要性を指摘する。さらに、話し手の態度として、「早口でまくしたてる」ことや、「語尾の不明瞭」などを避け、「リスナビリティ（聞きやすさ）」を優先すること、言語コミュニケーション以上に非言語的意思伝達が重要となることなどを強調している。これらはいずれも、ライフセービングにおけるコミュニケーションにも当てはまるものである^(注2)。

また、大和田・加賀谷（2008）では、ホームヘルパーのコミュニケーションスキルに関するアンケート調査をもとに、精神的支援についての議論が展開されているが、ここでは、McMahon（1996）の提示する「関係のスキル」（聴く・反応する・感情／感じ取る・言い換える・明確にする・情報を与える）などに依拠し、対人関係に関わるコミュニケーションの基本的スキルを以下のように規定する。

- ・うなづき、あいづち
- ・繰り返し
- ・共感

- ・明確化
- ・要約
- ・開かれた質問、閉じられた質問
- ・支持

これら7種類のスキルのうち、ライフセービングの現場における言語活動としては「繰り返し」や「明確化」などは正確性を高めるものとして、「共感」や「支持」は救助対象者の精神的側面を支えるものとして有効性があるものと考えられ、こうした点において参考となる指摘だといえよう。

コミュニケーションの基本は、相互の信頼性と誠実さであることはいうまでもないが、緊急時、しかも初対面の対象者といかにこうした関係を構築し、救助活動の効果を高められるかは、大きな課題である。

以下では、こうした先行研究を踏まえながら、ライフセービング教育現場におけるコミュニケーションの意識の実態について、具体的に議論を進めていきたい。

2. ライフセービングの談話分析： コミュニケーション記述の方法

本研究では、ライフセーバー養成の現場における学生たちのコミュニケーションに関する意識について考察を行うが、それに先立ち、本章では、ライフセービングのコミュニケーション活動を観察する姿勢について触れておきたい。

コミュニケーションとは、人間同士の関わりの中で生まれるもので、通常、何らかの目的を持っており、目的の達成へむけて、私たちは様々な言語ストラテジーを駆使する。その際に人間が操る「言葉」は、様々な特性からの分類が可能であり、たとえば阪倉（1963）では、

「コトバの機能」の4分類を活用して、文章のジャンル分けを行っている。

幼児期独語（自己中心的なコトバ）：

第一類 心覚えの文章

話しコトバ（対話のコトバ）：

第二類 申告・通達など

書きコトバ（文章のコトバ）：

第三類 報道・論説・広告など

内言（思索のコトバ）：

第四類 宣言の文章・小説など

この「コトバの機能」という観点から、ライフセービングにおけるコミュニケーションを考えると、その大きな部分を「話しコトバ（対話のコトバ）」が占めているが、加えて「内言（思索のコトバ）」もまた重要であることが分かる。これは、ライフセービングの現場で実際に表出される言語が、受信者志向を原則とした「人命救助」の発話であるため、短時間の中で心内において内容の適切性を判断された「表現活動」でなくてはいけないためである。

また、この「表現活動」においては、「WHO：誰が表現するか」、「WHY：なぜ表現するか」、「WHAT：何を表現するか」、「WHEN：いつ表現するか」、「WHERE：どこで表現するか」、「HOW：どのように表現するか」といった5W1Hが重要である。一般的な談話分析(DISCOURSE ANALYSIS)では、文章が文脈(CONTEXT)の中でどのように機能するのかを記述するが、その際、5W1Hの内容は、分析の観点として注目される事項であり、これはライフセービングのディスコースにもあてはまる。

ただ、これに加えて、ライフセービングにお

けるコミュニケーションの特徴として、状況を見極め、変化に対して常に柔軟に対応していく力が求められることが挙げられる。あらゆる可能性を考慮した上で行われる言語活動であるというこの特徴は、談話観察の上でも鍵となる要素である。

さて、こうした言語を記述するための方策を考える上でヒントとなる知見の一つに、Halliday & Hasan (1985)に見られる、テキストを「機能的 (functional)」な言語、すなわち「あるコンテキストにおいて何らかの働きをする言語」であり、「テキストはそれ自体が独立したものであると同時に、特定の状況のコンテキストにおける社会的意味を持つ実例 (instance) である」と位置づける機能主義の考え方がある^(注3)。

また、Brown & Yule (1983) では、談話分析は、学問領域によって意味合いが大きく異なり、「社会言語学者にとっては、会話の中に明示された社会的相互作用の構造が主たる関心であり、言語心理学者にとっては^(注4)、文字テキストの理解の性質が中心的な関心であり、コンピュータ言語学者にとっては、高度に制限されたコンテキストでのテキスト理解の操作モデルを生成することが中心である」と指摘している^(注5)。ライフセービングのコミュニケーション活動研究においても、こうした多くの領域を射程に入れた学際的なアプローチが求められるよう。

この他、ライフセービングのコミュニケーションで注意すべき事項として、発話のスタイル(文体)の問題がある。一般に、スポーツのコミュニケーションにおいては、発信者と受信者の関係は一定のパターン(例：チームメイト同士、指導者と選手など)に限定されるが、ライ

フセービングのコミュニケーションにおいては、そうしたパタンの限定は行われぬ。スタイル（文体）について、ギロー（1971）は、「話し主あるいは書き主の本性と意図によって決まってくる表現手段の選択から生じた陳述の様相である」と指摘していることから、発話のスタイルとは、言表を発信する側が作り出す要素として認められる。前述の通り、ライフセーバーはサーフガード活動などにおいて、あらゆるタイプの受信者とのやりとりを求められることから、そのコミュニケーションに多様なスタイルが認められることが予想される。そこでこうしたスタイル（文体）の観察も、談話分析における不可欠の要素と言えるのである。

以上、本章では、ライフセービングのコミュニケーションの特徴と、それを記述するための姿勢について述べてきた。以下では、これらをふまえ、ライフセーバー養成の現場における学生のコミュニケーションに対する意識について考えていきたい。

3. 学生アンケートの実施

ライフセービングにおけるコミュニケーション活動について、ライフセーバー育成の現場にある学生の意識を探る目的で、以下のような調査を行った。対象は、流通経済大学スポーツ健康科学部学生36名（男子28名 女子8名。いずれもライフセービング部に所属している者）で、アンケートの内容は以下のとおりである。

ライフセービングアンケート

*これはテストではありません。ライフセービング教育の研究と向上のために資料として使いますので、考えたことをありのまま、自由に回

答してください。

あなたの学年（ ）年生 性別（男・女）

質問1 ライフセーバーとして大切なコミュニケーション能力とはどういうものだと思いますか（どのような時に、どのようなことができることでしょうか）。

質問2 ライフセーバーとしてコミュニケーション力が必要とされるのは、どのような場面だと思いますか？ 思いつく限り、たくさん、具体的に書いてみてください。

質問用紙はA4版で、それぞれの質問の下に回答欄として縦8センチ、横15センチの枠を配し、この中に記入する体裁をとった。

4. アンケートの結果と考察

今回の調査は、学生が考えていることをできるだけ生の声で収集することを目的とするため、アンケートは自由記述の形式をとっている。以下、その結果についてまとめ、考察を行いたい。

4. 1. ライフセーバーとしてのコミュニケーション能力について

質問1は、ライフセーバーとして重要なコミュニケーション能力について（ライフセーバーとして大切なコミュニケーション能力とはどういうものか）であるが、学生からは、以下のような回答が見られた（以下、記述はすべて原文のままとする）。

まず、ライフセーバーの活動の中心的領域を占める「救助活動」において求められる力が挙げられた。

- ・相手に安心感を与えることができるもの。ケガや溺れている人に対しての声かけであったり、未然に事故を防ぐためにコミュニケーションをとる。
- ・けが人、おぼれている人に対するコミュニケーション（安心感）。
- ・救助するときに、相手にまず安心感を与え、そして的確に救助者にけががないか、どうしてこうなったか、などを聞き出せることだと思います。
- ・救助を求めている人はパニックになっていると思うので、その人を安心させられる能力。
- ・溺者に対して、安心感の持たれるコミュニケーション能力。
- ・CPRの時にも、溺者を救助するときも、ファーストとセカンドのコミュニケーションが取れていなくては救える命も救えないのではないのかと思います。
- ・緊急時には、人に協力を要請できるくらいなコミュニケーション能力が必要だと思う。

いずれにも共通して挙げられている事項は、けが人や溺者といった救助対象に「安心感」を与えられる力である。これに加えて、レスキューチーム内でのコミュニケーション、さらに事故を未然に防止するための声かけや、必要があれば周りの人へ応援を要請する力も挙げられている。

また、同じくサーフガード活動での力も多く指摘されていた。

- ・浜に来ているお客様の情報を聞く（お酒を飲んできているか、寝不足など）。
- ・情報を伝えて未然に事故を防止する。
- ・浜にパトロールとして歩いているときなど、

気軽に話しかけられるような雰囲気を持てる能力が必要。

- ・浜に来たお客さんに笑顔で声をかけることができ、お客さんが安心して海で過ごすことができるような声かけができる。
- ・海に入るときに事前に海の情報を話したり、目的は何か、子供はいるか、お酒は入っているかといった会話で情報をいただく。

これらの回答では、初めて会う海水浴客に対して、親しみを持たれる存在という役割を果たすことが強く意識されている。特にこの項目においては、いわゆる「言葉のキャッチボール」という、会話のやりとりが十分に行える状況にある相手との言語活動が想定されるため、相手からの情報獲得に関する指摘も多かった。また具体的な話題（相手の体調、浜へ来た目的、海の情報など）が示されていることも特徴であり、学生はライフセービング活動の場面をかなり細かくイメージができており、その場の発話態度や発話内容を十分に認識していることが分かる。

これらに加えて、ここでもライフセーバー仲間同士のコミュニケーションや連携を重視するものも見られた（体調や能力、得手・不得手など）。

一方、これらとともに注目すべきは、「日常的なコミュニケーション能力」、「緊急時に求められる総合的言語能力」についての指摘が、極めて多かったことである。以下のように、「日常会話において」初対面の人とのコミュニケーションをとれる力を持っていることが、重要だという指摘が多々見られた。

- ・いかなる時も相手の立場や思いを考え、行動できる能力。ライフセーバーだけでなく人と

しても。

- ・会ったとき、さりげなく日常会話ができること。
- ・初対面の人と円滑にコミュニケーションをとり、信頼を得たり、協力を求めるコミュニケーション能力。
- ・人と接するとき、誰とでも挨拶が出来たり仲良くなれるのが理想だと思う。
- ・知らない人との会話・連絡方法。
- ・普段の生活からどれだけ仲間と話せているかによって、能力を引き出すことができると思う。
- ・初めて会った人と話すとき、コミュニケーション能力があれば、その人のだいたいのことはわかるくらい聞くことができると思う。

「相手の立場を考える」姿勢を持ちながら、「誰とでも」「さりげなく」「挨拶ができる」、「仲良くなれる」、「信頼を得る」といった、総合的な対人関係を構築するためのコミュニケーション力が必要だという指摘である。更に、以下のような緊急時の対応に関する指摘も多く見られた。

- ・普通の人なら焦ったり、怖い状況でも、余裕をもって平然とした態度で、やさしさを感じる会話。
- ・相手に安心感を与えることができる能力が必要だと思う。例：地震が発生したときにあわてたり、自分のことで精いっぱいになるのではなく、周りに冷静な指示を出せる人。
- ・自分自身が身につけ、学んだことを相手にわかりやすく伝えることができること。相手がパニックになっているときでも、自分も相手も落ち着かせることができる言葉。

- ・突然事故などが発生しても、まず冷静に相手や周りの状況を判断し、適切な行動を選択し、相手との目線を合わせた上で、はっきりと伝わるように声を出して、誰に対しても「安心」「頼れる」と思わせる言動をとる力。

こうした指摘は、ライフセーバーである以上、浜での活動時だけにとどまらず、日常生活のあらゆる場面で何らかの事故などに遭遇した際にも、果たすべき務めがあるという考えに基づいているものと言えよう。特に、この調査対象者は、全員が2011年3月11日の東日本大震災を経験している学生であるため、そうした日常生活の中で発生する不測の自然災害などを想定した回答も見られたものと考えられる。

その他、以下のような、「困っている人にはどんなときにでも声をかけられる力」という指摘もあった。

- ・活動している時だけでなく、普段の生活の中で、他人が迷っている姿を見たらすぐに声をかけたり、悟ったりできる能力だと思います。
- ・困っている人に対して話を聞いてあげる、手助けをしてあげる。
- ・困っている人に対して救いの言葉になるようなコミュニケーション。
- ・相手が不安や悩みを抱えているとき、いかに自分が接することで良い方向へと気持ちを向けてあげることができるのかというものだと思います。
- ・普段からコミュニケーションをとり、能力をつけておく。他人が困っていそうなときに気づいてあげるやさしさが人として必要。

これらはいずれも「緊急時」という限定はな

く、周りにいる人が誰であっても、「困っている」という様子を感じたら、自分の力で助けになる行動をすぐに起こすべきであり、そのもっとも手軽な手段の一つとして「声をかける」行為が考えられているという回答である。この際、相手の様子を「気づく」、「悟る」、相手の話を「聞く」、といった受信者としての力が大きな意義を持つことにも言及が見られた。

ここから、学生たちは、どのようなコミュニケーション力をつけるべきかという課題に対して、ライフセーバーとして活動する具体的なケースはもちろん、日常生活においてもされるべきであり、どのような状況でも決して疎かにすべきではない能力と考えていることが分かる。そしてこれは、以下のような回答に端的に表れているといえよう。

- ・ライフセーバーだからというわけではなく、人間として相手を思いやる、相手の気持ちをわかることだと思います。たとえば自分が先輩で何もわからない後輩がいたら、レスキューの仕方などを教えるときに、相手の立場に立って考えてあげれば、後輩もすぐに理解でき、自分もこういう教え方をしなくちゃという気持ち生まれるからです。
- ・ライフセーバーだからコミュニケーションが大切なのではなく、普段の日常でも大切なものだと思います。ライフセービングから日常の生活に生かし、日常のことをライフセービングに生かすのだと思います。

4. 2. ライフセーバーとしてのコミュニケーション能力が求められる場面次に、ライフセーバーとしてのコミュニケーション能力が求める場面を具体的に問う「ライ

フセーバーとしてコミュニケーション力が必要とされるのは、どのような場面だと思いますか？ 思いつく限り、たくさん、具体的に書いてみてください」という質問についてまとめている（以下、記述はすべて原文のまま）。

まず、学生の回答で圧倒的に多かったのが、サーフパトロールにおけるコミュニケーションである。代表的な例を、以下に示したい。

- ・浜に立ってガードをしている時、お客さんが安全に遊んでいただけるように海の状況などを説明する。お客さんが不快の思いをしないように話す。上から言わない。
- ・お客様がどうしてほしいかを事前に知るため。
- ・浜でガードをするとき、来てくれているお客様がどんな人（泳げない、寝不足など）かを知っておきたいし、その日の海の状況や危険などを伝えたいので、コミュニケーションは必要。
- ・最初に会った時に、相手の情報を知る。浜の説明をする。
- ・ガードやお客さんとの会話（自分の知らないこと、自分の知っていること）。
- ・監視活動中（お客様・仲間とのコミュニケーション）。
- ・浜で遊んでいる人や休憩している人に話して情報収集（観光地や海の様子、その人の地元のことなど）。
- ・困っている人がいたとき適切な項目を聞き出せるか。
- ・けがをした人、海に来たお客さん、子供たちに対しての接し方。
- ・危険防止のための遊泳者への対応。
- ・これから海に入る人に対しての声かけ（今日はどこら辺に注意して海に入るか）。

- ・その人の情報収集（体調など）。
- ・事故を未然に防ぐための見回りの時。
- ・人がたくさんいて声が通りづらい時。
- ・困っている人がいたら、「どうしましたか、大丈夫ですか」、元気のない人がいたら「どうしたの？」の声をかけて人の手助けになってあげることだと思います。
- ・海を楽しんでいる人に、海の危険な所だけではなく、楽しさを教えてあげられる。
- ・安全や危険を促すとき。
- ・他人から話しかけられたとき。

ここでは、海水浴客に対して、極めて多くの視点から声かけや会話を行う必要性が指摘されている。具体的には、まず海や浜の様子を説明する、困っている人に積極的に話しかける、さらには相手の状況（けがの有無・迷子・体調）を聞くなど、発信・受信の両方の能力に関して求められていることが十分認識されていた。また「海の楽しさ」を教えたい、「地元の様子」の話を聞きたいという、「楽しい海水浴」という遊泳者本来の目的を高める手伝いとしてのコミュニケーションといった指摘もあり、これもライフセーバーとしての役割の一つと考えてよいだろう。

次に挙げられていたのは、レスキュー活動におけるコミュニケーションである。救助を求められている時、救助中、救助後の処置、さらには協力要請や自らが何らかのアクシデントや緊急事態に陥った時などに必要とされる言語活動についても、指摘が見られた。具体的には、溺者を安心させるための声掛け、救助中のセーバー同士のコミュニケーションなどが挙げられた。

また質問1でも同様の傾向が見られたが、日

常的な言語活動においても、ライフセーバーとして必要なコミュニケーション能力があるとして、次のような例があった。

- ・私生活。学校生活。
- ・挨拶。
- ・仲間間でも日常的なコミュニケーション。
- ・日常生活中（親・友達との会話）、他人と接するとき。
- ・普段の生活ですれ違ったり、話したりするとき。
- ・仲間内で絆を深めるとき。
- ・仲間と協力して何かを行うとき。
- ・就職活動やバイトなど日常会話。

これらはライフセーバーとしてというよりも、一人の大学生として、社会生活を送る人間として培うべき力という回答と見ることができる。実際の海浜でのガードや救命においては「的確に判断し、行動する」、「指示を出す」という活動が求められるが、その基盤になるのはあくまでも普段の生活態度だと言える。そこから普段の生活も、ライフセーバーとして必要とされるコミュニケーション場面に含まれるという見解が示されているのだと考えられる。自分から会話の発端を作りだすような挨拶や、仲間の間での信頼を作り出すためのコミュニケーションは、普段の生活で重要であるという考えが示されていた。

その他、ユニークな例として、次のような指摘があった。

- ・外国人に対してコミュニケーション力がとても必要だと思います。日本は旅行大国で、海で泳ぐ外国人もいっぱいいると思います。そ

の時、協力とか、冷静の気持ちを伝えるとかはすごく重要だと思います。

前述のように、ライフセービングでは、受信者にきわめて多様なパターンが認められ、外国人とのコミュニケーションも、もちろんその一つに考えられる。現在、ライフセーバーを目指してトレーニングを続けている学生にとっては、日本語のコミュニケーション以外にも、英語やその他の言語を用いた言語活動が求められるケースが今後増大することからも、これはライフセーバー育成の教育現場において注意すべき指摘だといえよう。

このように、学生は、ライフセーバーとしてまずはパトロールやレスキューにおけるコミュニケーション力が重要であり、そしてそれらはライフセービングのトレーニングとともに日常的な言語活動からも培われる力だと考えているということが明らかになった。これは、次の回答例に端的に表れているといえよう。

- ・ 普段生活をしていく上ですべてが必要とされると思います。例をあげると、海などでの活動中、遊びに来たお客様に対してうまく気を付けてもらうことを話す場面だと思います。また知らない人に限らず、建物や道を聞かれた場合に、しっかりと相手がわかるという指示をしなければいけないと思います。

コミュニケーション活動は、生活全般に関わるという特性を持っている。そのため、ライフセーバーとして、日常生活においてもその姿勢を持ち続けるべきであるという考え方が、今回のコミュニケーション能力に関する調査において、非常に明確に示されたと言える。

5. おわりに

以上、今回の調査から明らかになったことは、学生はライフセーバーとしてコミュニケーション能力の必要性を十分認識しており、コミュニケーションスキルを身につけなくてはならないという意識を強く持っているということである。そしてその養成は、トレーニングや実際の活動にとどまらず、日常生活においても行われるべきだと考えられていた。

ライフセービングの実際の救助場面においては、想定内外の様々な事柄が発生し、そうした緊迫した状況下においても、ライフセーバーは、一定の姿勢を保ってコミュニケーションを行うことが求められる。そこで、ライフセーバーの育成においては、発生する事故内容を体系的にまとめ、それに即した言語能力を整理して指導に組み入れることが急務といえよう。それによって、現場でのコミュニケーション能力や対応能力の向上も期待される。さらに、こうした力を日常生活のコミュニケーション活動にも積極的に活用することで、そのスキルはいつそう磨かれることが予想される。

今回の調査の結果をふまえ、今後は、さらにライフセービング活動での具体的なシーンや状況設定なども含めた言語活動の実際や、そうした個々のケースに応用できる高い言語能力を育成していく方策について考えていきたい。

注

(注1) 日本ライフセービング協会 (JLA) が資格制度として認定している「ベーシック・サーフ・ライフセーバー資格」では、18歳以上(高校生は不可)で、400mを9分以内、50mを40秒以内、潜行20m以上、立ち泳ぎ5分以上ができる者とされている。現在、この資格には約12000人の取得者がいる。

- (注2) この他, ロング (2012) は, 日本語教育の立場から, 災害時におけるコミュニケーションの問題を取り上げているが, これも, 多様な相手を救助するレスキューにおいて重要な問題の一つである。この研究では, 東日本大震災と阪神大震災における外国人に対するコミュニケーションを議論している。災害時という緊急時に外国人は不利な状況に置かれており, 「ただでさえ日常において日本語での理解や表現を難しく感じる」のであるから, 「緊迫した状態になるとなおさらそうである」こと, 同じ災害時でも外国人負傷率・死亡率はともに日本人よりも高いことなどを挙げ, 外国人に対する多言語放送の問題点として, 「即時性・柔軟性・関連性・応用性・現実性・使用言語数・地域性」などを指摘している。
- (注3) たとえば, Halliday&Hasan (1985) では, 以下の視点からテキストの分析が行われている。
- ・状況のコンテクストの3つの特性 (談話のフィールド= 言語活動領域, 談話のテナー= 役割関係, 談話のモード= 伝達様式)
 - ・言語のメタ機能 (観念構成部門: 経験的・論理的 対人関係部門 テキスト形成部門)
- (注4) クラーク&クラーク (1981) では, 伝統的に哲学者と言語学者は言語の構造 (表層構造と基底構造) と機能 (発話行為, 命題内容, 主題構造) に最大の注意を払ってきたが, 「人が話したり理解したりする際, 総動員している心的過程は, 言語の構造や機能に直接現れるものではない。それらは, 構造や機能を超えているので, 固有の方法によりそれ自体として研究される必要がある」とし, 言語心理学の関心の中心として「言語把握 (理解), 産出, 獲得」の問題を取り上げている。
- (注5) Brown & Yule (1983) では, こういった幅広く多様なアプローチを踏まえながらも, 言語学という学問に基盤を置き, かつコミュニケーションの中心に話し手や書き手を据えて, コミュニケーションに用いられる言語の形態を明らかにしている。そしてその中心的関心は, 人の発する言語がコンテクスト中である目的のためにどのように用いられるかを明らかにすることとされている。

参考文献一覧

- 井上真紀・佐藤俊哉・片岡由美子・原大介・神田和幸 (2004) 「看護の現場で必要とされる言語についての調査と分析」『中京大学論叢』45(1) 129-154
- 大和田猛・加賀谷真紀 (2008) 「ホームヘルパーにお

ける生活援助としてのコミュニケーションスキル——青森県内におけるホームヘルパーのアンケート調査結果を通して——」『青森保健大雑誌』9(1) 21-28

- P. ギロー著・佐藤信夫訳 (1971) 『文体論: ことばのスタイル』白水社
- H. H. クラーク & E. V. クラーク 著 / 堀口俊一訳 (1981) 『言語と心理: 聞くこと・話すことのメカニズム』桐原書店
- クワーク・ランドルフ著・池上嘉彦他訳 (1988) 『ことばの働き テキスト構造についての8講』紀伊国屋書店
- 斎藤 繁 (2009) 「危機介入におけるコミュニケーション」『弘前学院大学社会福祉学部研究紀要』9 21-27
- 阪倉篤義 (1963) 「文章の機能と目的」『講座現代語5』明治書院
- 住大恭康 (2005) 「医師・患者コミュニケーションの諸相——医療コミュニケーションを検討するためのメモ——」『医事学研究』20 1-24 岩手医科大学
- 日本ライフセービング協会編 (2008) 『サーフライフセービング教本』大修館書店
- 廣瀬春次・太田友子・井上真奈美・中村仁志 (2011) 「看護学生のコミュニケーション活動に関する研究」『山口大学学術情報』4 47-53
- ロング・ダニエル (2012) 「緊急時における外国人住民のコミュニケーション問題——被害日本大震災と阪神大震災から学べること——」『日本保健科学学会誌』14(4) 183-190
- G, Brown. & G, Yule. (1983) *Discourse Analysis*. Cambridge.
- M, A, K. Halliday & Hasan, R. (1985) *Language, context, and text: Aspects of Language in a Social-semiotic Perspective*. Deakin University
- McMahon, M, O. (1996) *The General Method of Social Work Practice: A Problem Solving Approach (3rd ed)*. Printice Hall.

本研究は平成26年度科学研究費補助金 (基盤研究C) 「我が国のライフセーバー育成に向けたコミュニケーション教育の方法とその実践」(26350729) (研究代表者 立川和美) の研究の一部です。